

寺本さんってどんな人？

生誕百年を祝い
その人柄と人生をたどるパネル展
寺本さんってどんな人？

パネル展の開催に対する私たちの思い

1913年9月13日に寺本知(てらもと ちか)さんが誕生して、今年で100年。

寺本さんは、私たちの地域で、とよなかや大阪で、そして世界中で、人間が解放され、これからの「未来」がよりゆたかなものになるように、さまざまなものを私たちに託してくれました。

そして、私たちは今、その「未来」を生きています。

寺本知さんの生誕百年を祝い、その人柄と人生をたどりながら、寺本知さんが私たちに「託してくれたもの」を振り返ってみませんか。

パネル展では寺本知さんの人柄を、運動、商業、文化、思想、家庭の5つの側面からたどっていきたいと思います。

運動家としての寺本知さん

寺本さんは、人々が相互に自由で、平等であるような、人間の解放を目指し、先人たちが種をまいた、「部落解放運動」の芽を育て、そして花を開かせてきました。当然ながら、その道は決して容易なものではなく、仲間を失う辛い時期もありました。

寺本さんの運動家としての人生をたどったとき、大きく5つの時期を経てきたことがわかります。

- ①豊中・大阪での部落解放運動の発足期**
部落解放運動の先人たちと出会い、自分たちも運動を始めると、「人民解放豊中青年同盟」を発足させるなど、運動家として活動する時期です。
- ②各自手弁当で運動する苦渋の時期**
運動を始めると、組織的基盤が弱く、運動は各自の手弁当であり、生活が困窮する者さえあった時期です。政治的にも松本治一郎氏が不当に公職追放されるなど、活動家としての寺本さんにとって苦渋の時期です。
- ③運動の組織的基盤の形成期**
苦しい時期を経て、大阪府そして豊中市の同和事業促進協議会が発足、行政や学校などの連携が生まれるとともに、財政的な基盤もはっきりし、運動の「組織」としての基盤形成に、寺本さんが尽力する時期です。
- ④「大衆による部落解放運動」への成長期**
これまで寺本さんをはじめ様々な運動家により牽引されてきた部落解放運動が、住民闘争を経て「大衆による部落解放運動」へと成長を迎えます。この成長が豊中支部「再建」とされる由縁です。
- ⑤部落解放運動の展開期**
同和对策特別措置法が制定され、部落解放運動が展開期を迎えます。また、これまでも「自分たちのための運動」から「部落差別撤廃への運動」へと、さらなる成長を迎えた時期でもあります。

①豊中・大阪での部落解放運動の発足期 豊中水平社創立

全国水平社創立の熱気が冷めやらぬ1923年(大12)豊中においても寺本知さんの父親を含む多くの青年たちが中心となり、「豊中水平社」が創立される。小学生だった寺本さんは、その熱気と先輩たちの家に強い影響を受けました。

豊中水平社創立が1923年(大12)の春頃、村の信行寺は、種家總代や村の役員が反対して借りられへん。会場は溝口吉吉さん宅でした。ぼくが、克明小学校三年生ぐらい。ぼくの親父の由太郎が30歳ぐらい。創立メンバーは、今西弥之助、寺本由太郎(父)、今西今次郎、溝口幸助などがいた。澎湃(ほうはい)とした水平運動のながれ、時代の風潮やったんや。皆立ち上がったんやな。(中略)

寺本知(寺本知のむすぶかり)の居宅(中略)

今西弥之助さん、ぼくはこの先輩を「弥之(やの)さん」と呼んでいました。弥之さん、運動しながら、一生懸命本読んでまして、勉強するわけやね。(中略)

ぼくより13歳上やから、長兄と末弟みたいで、かわいがってくれました。そして、ぼくに、子どもたちが、こういう曲がくねった道でないような道を通って通学するのがかわいそうやから、くねくね道を絵に描いてくれたというんや。(中略)

ぼくは、子どもなりに一生懸命描いたわけなんや。弥之さん、それを役場へ持って行ってね。村長さんに陳情したんですわ。

「子どもたちが通学するのに・・・道は歩にくいし、池や川は危ない。・・・道路整備して真っ直ぐにしなければ」と、そういう人なんや弥之さんは。(中略)

※寺本知のむすぶかりにんげんはずばらしい!5、7頁

①豊中・大阪での部落解放運動の発足期 瓦礫から立ち上がった青年

1945年(昭20)の敗戦直後、寺本さんは31歳、結婚し子どもも誕生、大阪府の社会課職員として地方改善事業(同和事業)に携わっていたが、瓦礫となった街や多く戦災者の部落の悲惨な姿に、「これからは、弱い者が人間らしく生きられるように、青年が力をあわせて立ち上がるべき」と痛感し、その解決を模索していた。

府庁の屋上からながめると、大阪の街はいちめん廃きまはわれ、廃墟でした。

敗戦の翌年2月、ある寒い日だった。その日も歩いて谷町筋の法円坂の坂の上まで来たとき、ふと、北方の天満一帯に目をやった。夕もやにせず瓦礫の街は、一点の灯りさえ見えなかった。見渡すかぎり灰色の、茫漠とした瓦礫の街。・・・悲惨な戦災者たちの姿が哀れでした。部落の貧しい生活は、それに輪をかけている。

しかしこの時、ぼくの胸に閃光のように、きらめくものがあつた。いまこそ、弱い人が力を合わせて立ちあがるときや。人間が生きていうえて、何がちばんだ切ないものかを、さぐりだしていかなければならない。と。とぼとぼと、法円坂を下りながら、ぼくは考えつつ歩いていた。

空襲で大きな被害を受けた新島-桜塚付近

当時のむらのような

※寺本知のむすぶかりにんげんはずばらしい!19～20頁

①豊中・大阪での部落解放運動の発足期 戦後の解放運動の再出発 部落解放全国代表者会議への参加

1946年(昭21)2月、戦前・戦中に種々に分かれていた部落解放のための運動指導者たち(水平運動の父といわれた松本治一郎さんをはじめ、天皇直訴事件の北原泰作さん、融和事業の指導者・山本政男さん、西本願寺の塾生の植原真隆さん、東本願寺代表の竹内良温さん)が、大同団結して発起人となった「部落解放全国代表者会議」への招請状が寺本さんに届きます。会議に参加した寺本さんは、そこで、被差別部落の完全解放を主旨とする「部落解放全国委員会」の結成を目的とすることになりました。

2月19日、この日も寒い日やったが、会場である京都新聞会館は、ぎっしりつまりました。人間尊重と部落解放への意欲で、熱気も興奮につつまれていた。この日、「部落解放全国委員会」が結成されました。(中略)

…この大会には、豊中からは、今は亡き、今西安太郎さんと下村輝雄さん、それにぼくと、三人が参加しました。この興奮した空気にひたりながら、ぼくは、勇くして見る事ができなかった全国水平社創立大会(1922年3月3日 京都岡崎公会堂)に思いを馳せていました。ぼくは、この大会で大きなショックを受け、決意して帰ってきました。

下村くんらと、青年の情熱で、組織をつくり、解放運動をやろうと思いました。

松本治一郎委員長と

※寺本知のむすぶかりにんげんはずばらしい!21頁

①豊中・大阪での部落解放運動の発足期 「人民解放豊中青年同盟」 「部落解放大阪青年同盟」結成

1946年(昭21)2月の「部落解放全国委員会」の結成集会から戻った、翌3月4日に、豊中において「人民解放豊中青年同盟」を結成しました。さらに、府内の各部落の青年に檄を飛ばし、8月4日、大阪援護会館にて「部落解放大阪青年同盟」を結成するに至ります。戦後の大阪の解放運動は、まず豊中からはじまり、部落解放大阪青年同盟が現在の部落解放大阪府連合会の母体となりました。

ぼくは、この大会で大きなショックを受け、決意して帰ってきました。下村くんらと、青年の情熱で、組織をつくり、解放運動をやろうと思いました。そこで3月4日に、「人民解放豊中青年同盟」を結成しました。

青年同盟の使命(寺本自筆原稿)

名称は青年同盟だけど、旧自治会の役員全員、お年寄りも加入してくれて…もちろん、青年がリーダーシップをとりました。(中略)さらにぼくたちは、府内の各部落の青年に檄を飛ばした。…この年の5月20日、豊中の信行寺で「部落解放大阪青年同盟」の第一回総会をひらきました。赤蓮士の和島先生や高松直一君ら約20名ほどの青年が集まってくれました。・・・ぼくたちは、米の飯がないので、ナン(粉)や、さつまいもを食べながら運動していた。そうして、「部落解放大阪青年同盟」の創立大会が、1946年(昭21)8月4日、暮熱きびしい中で、大阪援護会館で開かれた。300人ぐらいの青年たちが集まり、会場は熱気が燃えるようでした。

※寺本知のむすぶかりにんげんはずばらしい!23頁

③運動の組織的基盤の形成期 朝日新聞糾弾から 「部落・三百万人の訴え」へ

1956年(昭31)1月9日付朝日新聞の学芸欄に、石上玄一郎の「文壇論」と題した文壇批判文で、昨今の文壇の醜さを比喩して「特殊部落的狭量さ」と表現した差別記事がされました。寺本さんの指摘から朝日新聞社への糾弾となり、石上氏も朝日新聞も、深くその非を認め、社会的使命や職責として、部落解放のために協力することを誓いました。朝日新聞は「部落・三百万人の訴え」を連載し、この連載は社会に大きな反響をあたえる画期的なものとなりました。



朝日新聞の部落・三百万人の訴え (1956年12月1日)

新聞社の差別性を追求して、2回目に作者の石上玄一郎さんができた。そこで彼は「私はいまだかつて人間を差別したことがない。むしろ、そういうのを否定する側で闘ってきた」というわけです。そこで、ぼくは、日本の文壇の現況が分表し・・・封建的だと書かれた意味はわかるが、特殊部落的形態だとなぜ表現したのか、そこに反響があったので、それをつかんで、この反響のようだとなぜ書けへんだったというんや。

あなたは、朝日新聞という大きな公器で、現在差別がある世の中でそのようなことを書くのは、あなたが一番効果があると思っ、働くや封建制を比喩し暴露するのは、最も確かな言葉として、特殊部落という言葉を引き出したんじゃないか? ...今ある部落差別を助長、拡大する行為そのものではないか、と言ったら、しばらく考えてから、お詫言いました、それとおりですと答え失礼をわびた。

【寺本知のわずかたりになんげんはすばらしい】47-49頁

これからの運動は、教育や! ③④児童館開館(1955年)

戦後の1950年(昭25)頃、全国的に少年非行が目立ちはじめ、豊中でも問題となりました。そこで寺本さんは数人の青年たちとともに「みんな子どもを守ろう! みんなで教育を守ろう!」をスローガンに子ども会活動を始めることになりました。やがて、この取り組みは、地域住民の心を動かし、子どもが勉強し集まることのできる施設の要求に発展していき、1955年(昭30)、児童館が誕生しました。同和地区では全国で最初の児童館でした。最初が「地域の集会所」という意味でしたが、「部落の解放は、まず子どもの教育から」ということで児童館に変わりました。



豊中公園に建っていた児童館

ここは子どもの遊び場でもあり、学習の場でもありましたが、その他、特別の英語・数学・珠算の学習会、自然に学ぶ会、ボイスカウト活動などはじめ、移動バス(ブザーハンズ)で市内全域を巡回して、子どもたちに楽しい遊びの指導まで行っていました。また、地区の女性グループをはじめ、近隣の二つの婦人団体の交流の場ともなりました。このように児童館は、児童福祉だけでなく「豊中市市民」の指導活動もあって差別との戦い、人間解放、民主主義活動の拠点ともなりました。



児童館活動の様子

(解放会館20周年のあゆみ・寺本文要約より)

部落解放の砦に ⑤市立解放会館開館(1973年)

豊中解放会館の建設は、講習や講座の開催、集食、会議の場としての隣保館の建設要求に始まりました。この頃、地域住民の集食や活動の場は主に児童館が使われていましたが、大勢が集まる場として、その狭さが課題となっていたようです。その後、地域住民の願いや要求をもちよった総合施設としての解放会館建設要求に市が応える形で、1973年(昭48)、隣保館・保育所・児童館・診療所を持った総合施設として豊中解放会館が誕生しました。



解放会館通景(1973年)

解放会館は基本的人権尊重の精神に基づき、地域住民の社会的、文化的、経済的生活の向上を図るとともに、同和問題の速やかな解決に資することを目的に建設されました。その目的や役割は人権まちづくりセンターに改称された現在も同じです。



解放会館竣工式

現在、私は解放会館について、このようにありたいという願いと、大いなる期待をよせています。解放会館は、みんな(市民)が、やさしくあたたかい心を養う聖堂である。「解放会館は、みんな(市民)の心を豊かに楽しませ、人間を解放する劇場である」「解放会館は、差別に傷ついた人々を癒し、人間としての自覚、自立、自開の精神を養う道場である」

(解放会館20周年のあゆみ・寺本文要約より)

④「大衆による部落解放運動」への成長～ ⑤部落解放運動の展開期 市議会議員



1979年4月 街頭演説

寺本さんは、1963年(昭38)から6期24年間、市議会議員を務めました。1963年(昭38)の豊中市の人口は25万人でしたが、1966年(昭41)には41万7千人になっており、この時期、豊中市は、人口急増による学校や保育所の建設に追われていました。その費用のため財政危機の連続でもありました。また、伊丹空港の拡張と航空騒音による被害拡大と空港問題は大きな課題でした。寺本さんの議会活動は、まちづくりの理念に基づくものでした。例えば、1966年(昭41)3月の代表質問では、「自治体の第一義的責務は、生活環境施設の整備、生活後援の提供等、いわゆる社会開発の面において最大限の努力を払うべきであり、その根本理念は、ホーム・ツーリズムなんぞです。人間大大切に、人間を尊重する、住民を忘れた政治であってはならないということなんです!」広域行政といったような概念、理念、また近畿圏整備、そうしたことがやましく論じられておりますけれども、これらはどうも人間の生活を忘れていた面が多いのではないかと「どうもいまの為政者の頭の中には生きていく人間の生活がなくて、山や川の地形だけがふるのではないかと懸念をいっています。今日の政治の中心が土木建設的なものが人間より優先しているように思うのであります」と述べ、まちづくりの方向性を先に示すべきであるといっています。また、現実労働者の地位向上、待遇改善について強く求めていました。教育においてもべき論を常にいい、教員の教育研究の自由を教育委員会に求めていました。



議会代表質問する寺本さん

④「大衆による部落解放運動」への成長期 住宅闘争と部落解放同盟豊中支部再建

1962年(昭37)から始まった豊中の被差別部落の生活改善要求は、寺本さんなどの指導のもとで「家よせ運動」として大衆的な要求運動として展開されるようになりました。



1950年ごろに見られた豊中地区の住宅

当初、「そんな夢みたいな話」ともあきまが先に立っていた人たちも、現実には他の部落で住宅が建ち始めていることを知り、「家がほしかったら、運動せなかん。」と「住宅要求期成同盟」を組織して運動を展開していった。1965年(昭40)に第1種入居。1967年(昭42)の第2種入居時になって、それまで、何もせず傍観していた人たちが、突然「住宅公平会」なるもののでつち上げ、「我々にも家よせ」と市に圧力かける無謀な横やりを入れてきた。寺本を先頭に大阪府連の応援を受け、住宅問題のたまたま集った抗議行動は徹夜覚悟の交渉の結果、無事入居を済ませることとなった。



豊中支部再建大会 (1967年7月)

家よせ運動を部落大衆が自らの力によって勝ちとったことを契機として、1967年(昭42)7月大衆的女部落解放同盟豊中支部が再建された。

※「人間の血は濁れず」85～88頁

⑤部落解放運動の展開期 狭山同盟休校

豊中支部での狭山事件との闘いは、1969年(昭44)秋の班集会での真相の訴えにはじまり、現地調査や裁判闘争への参加など多くの支部員が闘いに参加しました。



決意を述べる寺本さん

狭山事件で石川一雄さんの無罪そして再審を訴えるため、石川一雄さんが不当逮捕された5月23日を闘いの日とし、毎月23日を狭山デーと位置付けて、豊中市内各駅前でのどろ配布や市内内子など、市民共闘と一緒に闘う支部として取り組みを高める時期を迎えていました。このような時期に行われたのが、上告違憲書提出日である1976年(昭51)1月20日の山崎とする同盟休校闘争でした。支部の中には慎重論がありましたが、寺本さんは「1・28の闘いは人間であるか否かの闘いなのだ」と支部の集会で熱く語りました。

結果的に不参加児童2名という成果でしたが、議論が小学生の子どものいる家庭に限定され、場合によっては「石川さんを取り戻す闘い」という同盟休校の意義が家庭内で十分に話し合われぬままに参加するという弱さを、抱えていました。



子どもから大人までが集まった早期集食

同年の5月22日にも同盟休校闘争が行われ、これが契機となり青年部組織に向けてスタートを切ることにしました。1980年(昭55)1月28日とあわせて3回にわたる同盟休校闘争は、それまで闘いたくないといえるものがなかった豊中支部にとって、まさに闘う支部への転換をはかるべき重要な意味をもっていました。

⑤部落解放運動の展開期 克明小学校をよくする会

1972年(昭47)11月28日「克明小学校をよくする会」が発足しました。子どもたちのために、学校任せにするのではなく、自分たちで考え、行動して克明小学校を良くしていくことを目指しました。当初は、克明小学校、同PTA、教職員分會、克明公民分館、解放同盟、教育守る会の6団体が始まりました。



克明まつり(1979年)

よくする会は独自の市交渉を毎年行い、体育館の建て替え、箕輪小学校の建設、実質30人学級の実現、教員の加配、プールとかがやき校舎建設などを实现了。その他にも玉井公園など3児童公園の設置など多くの成果を上げてきました。

寺本さんは副会長として、大阪府との折衝など教育条件改善や校区環境向上などに尽力しました。



よくする会市交渉の様子

また、たそがれ音楽会、克明まつり、社会見学、新年互礼会などを行い、校区でのつながりの中心組織になっていきました。校区内の子どもの発声や自治会精成もよくする会がきっかけになったと語られています。

1996年(平8)までは毎年総会が開かれ、講演会などが行われていました。

寺本知さんと文化

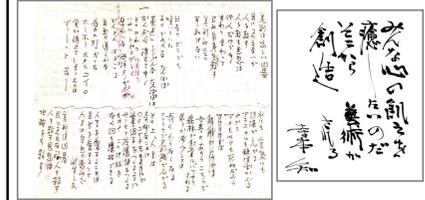
寺本さんは文化への造詣が深く、また、詩、文学、映画、書など多くの作品を残されています。加えて、芸術・文化の普及と教育、芸術家・著名人との交流を通じて、その功績は、とよなかにとどまらず、大阪、日本と広がりを見せています。



②芸術・文化の普及と教育

③芸術家・著名人との交流

作品 いろいろ



作品 「橋のない川」 人間の心をとり返すために

1989年に大阪で開かれた出版記念祝賀会で、著者住井素子さんから『橋のない川』を同輩で映画化してはどうかと提案がありました。これをきっかけに、映画制作委員会が発足、寺本さんは住井素子さんとともに、「相談役」として映画の作成に携わりました。

住井さんは第1巻のあとがきに、この作品への想いを次のように記しています。

「『水平社宣言』のうまれる必然性を、どこまで解明できるかと、時には不安に怯えながら、編年十六年間書き続けた。『橋のない川』のモデル、それは水平社宣言でありその背後にある貴族階級の差別に泣いた、千、万、億人の涙…」

寺本さんの直筆ノート



このような「橋のない川」という映画にける、寺本さんの想いと苦悩が自筆のメモから読み取れます。

「文化の面で、良識（人間の心）をとり返す作業がかけている。映画も、人間の心の、創造へ。」

差別の現実が分かるが、時代もあり、原作に忠実になるほど、抽象的になる。」

監督の東陽一さんもこう記しています。

「監督としての私は、この映画で、明治、大正時代に生きた被差別部族の人々を中核として、そこから、日本人全体を貫く、ある「プリミティブ」な＜心性（こころ）＞を描きたかったのだ。」

映画「橋のない川」制作方針

芸術・文化の普及と教育 たたかひの祭り

部落解放同盟中央本部主催の部落解放第1回分科会が1978年11月に大阪で開催されました。第8回(1995年)まで開催されました。



第1回たたかひの祭りのポスター
部落解放・人権研究所ウェブより
<http://blhm.org/nyumon/postwar60/050.htm>

…そりや、理論的な追究、研究は、ひじょうに大事なんですけれども、やはり、こう、人間が悲しいときに歌ったり、うれしいときに声をあげて表現したり、踊ったりすることは、これは生きている人間の、ほんとうの姿ですからね。

こういうものを大事にしないで、やはり部落解放運動、人間のほんとうの解放というのはありえないんじゃないか、と私は思うんです。

寺本知「魂の種」219頁より。



第2回たたかひの祭り実行委員会・中央に寺本さんのメッセージが。

芸術・文化の普及と教育 識字は運動の原点です



寺本さんは、解放同盟中央本部文化対策部長をしているときに、全国識字経験交流会を開いています。

寺本さんは識字運動にも熱い想いがあり、次のように語っています。

差別のために、貧乏だったり、いろいろなことが原因で学校にも行けなくて、文字を覚える機会に接することができなかった。または少なかった。

なぜそうだったのか？

文字を習っている中で、また、いろいろな人々との接触の中で、段々目覚めていくわけです。そうして自分が苦労してきた今までの経過・境遇が、差別の結果であったことに気づいていくんです。差別と闘うという自覚も生まれてきますし、自分が人間であるという自覚も生まれてきます。

そういうことを含めて、私たちは、奪われた文字を奪い返すとやっているわけです。文字を奪い返すということは差別によって人間性を奪われていた、その人間性を取り返すということなのです。

識字運動とは、単に文字だけ覚える学習の場ではなく、すべての人間解放の作業が取り入れられた文化運動なのだ。寺本さんは繰り返して強調していました。



よみがききょうしつ・とよなかのある日の風景

芸術・文化の普及と教育 大阪人権歴史資料館設立



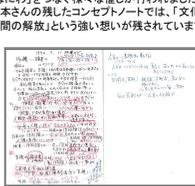
1995年12月リバティおおさかリニューアルオープン時
(寺本さん左から2番目)

大阪の部落解放運動の貴重なモニュメントである旧来小学校校舎の一部を保存するとともに、これを改修し、オープンしたのが、大阪人権歴史資料館(リバティおおさか)です。

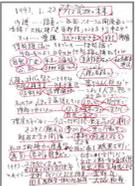
高度経済成長のなかで、影を潜めていく「なにわ」の庶民生活、文化とのかかわりを見つめ直しながら、人権文化を育てていく拠点として、1985年(昭60)12月にオープンしました。

リバティおおさか設立に向けて動き出した1982年(昭57)、寺本さんは常務理事に就任し、1990年(平2)からは館長に就任、亡くなる96年(平8)まで務めました。

リバティおおさかでは「沖縄おどり」や「アイヌ民族の未来」など人権と文化、そして「なにわ」をつなぐ様々な催しが行われました。寺本さんの残したコンセプトノートでは、「文化を通じた人間の解放」という強い思いが残されています。



沖縄おどり コンセプトノート



アイヌ民族の未来 コンセプトノート

芸術・文化の普及と教育 豊中文学

『豊中文学』は1958年7月31日に第1号が発行され、現在までに第34号(2013年3月31日)が発行されています。

後に寺本さんが主催となりましたが、「第1回会合1月6日夜」と書かれたメモでは、「会計 寺本」と書かれています。

第1回会合には、主催者の水戸さんを中心に、寺本さんを含め8名が参加し、会の名稱を「豊中文学の会」、雑誌名を「豊中文学」に決定したことが記されています。

創刊号で、寺本さんは「悪い雲」という部落問題を真正面からとりあげた作品を発表しています。1920年代から電灯が普及したことで、「電柱一本立ててなんぼ」という「稼ぎ」はいいのですが、「命の危険」を伴う仕事につく人がむらに多くなりました。主人公もそのひとりで、感電死し、その亡骸が村に届けられるシーンでは、当時のむらの様子、ひとびとの直面してきた「悲愴のきわみ」が描かれています。

寺本さんは、当時住んでいた「町名」と祖父の「名前」からあるペンネームを使っています。是非、探してみてくださいね。

『豊中文学の会』(1958. 1)と題された寺本さんの自筆ノート



著名人・文化人との交流 佐藤忠良・坂本 遼

松本治一郎像の制作をお願いした佐藤忠良さんと温かな交流のエピソードがあります。



佐藤忠良さんアトリエにて

三度目のアトリエ訪問の際、ついつい芸術のことに夢中になるあまり、肝心の代金のことを忘れていた寺本さん。勇気をもって東京駅から電話したところ、佐藤さんから意外な返事が。「寺本さん。代金はいりません。」

佐藤さんは中国に留学していたころ、松本治一郎氏に会い尊敬していました。「だから、先生のお人柄はわかっています。お金はいりません。」そんなあほなことあるかい！？と代金は支払ったそうですが。

「彫刻ひとつにも人間の美しい心の交流がおまっしゃる。」

寺本さんは、晩年、職業欄に「詩人」と書いていたそうです。詩人、寺本さんの誕生を決定付けた人、それが坂本遼さんです。

寺本さんは『豊中文学』に2篇の小説を発表後、何も発表できない時期がありました。それの切り期日が迫り、やむなく、はじめて5篇の詩を発表したのですが、それを大阪朝日新聞の文化欄でほめてくれたのが、坂本さんでした。

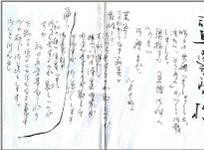


「たんぼぼぼ」の様子

坂本さんは1970年に亡くなりましたが、坂本さんの詩集「たんぼぼ」から各づつ「たんぼぼぼ」が毎年行われ、寺本さんも参加してきました。

芸術家・著名人との交流 司馬遼太郎

交流関係の広がった寺本さんですが、司馬遼太郎さんとの交流を、触れないわけにはいきません。



寺本さんから司馬遼太郎宛てた礼状

司馬遼太郎から贈られた「そうめん」に対する感謝の手紙の下書きもあれば、作品「竜馬が行く! 風雲編」にある差別表現に対する寺本さんからの申し入れ書、そして司馬遼太郎からの返信など緊張感を伴うやり取りもみられます。

司馬遼太郎からの手紙



芸術家・著名人との交流 野間宏

作家の野間宏さんともいろんな交流のエピソードがあります。

1988年(昭63)、野間さんは、文学への貢献をたたられ、朝日新聞社から「朝日賞」を贈られることになりました。すると、「朝日賞の贈呈式の介添人として出席して欲しい」と、寺本さんに依頼の連絡がありました。贈呈式の介添人といえば、配偶者(夫または妻)であり、夫婦で購読舞台に立つものです。遠慮する寺本さんに、この一言が。

「野間さんは、たってあなたに来てくれといわれています。寺本さんの介添えに奥さんも一緒にお願いします。」

こうして介添夫婦が野間さんの贈呈式を飾りました。

野間さんの寺本さんへの信頼は深く、亡くなる7日前、野間さん本人から寺本さんに電話がありました。「の...の...です。でもらさんと。別に用事はないのですが、なぜか、あなたに電話したくなって、...」

いつもと様子が違う、はっと何か不安なものを感じた、と寺本さん。三歳年下の野間さんは、寺本さんを見のように思っていたのかもかもしれません。



野間宏さんの朝日文学賞授賞式にて

芸術家・著名人との交流 水上勉・丸木俊・灰谷健次郎・斎藤真一



水上勉の「父と子」出版記念会で



灰谷健次郎さんと解放会館応接室で



丸木俊さんと原爆の図展で



斎藤真一さんのアトリエで

寺本知さんの思想

戦後の部落解放運動をはじめ、文化・芸術活動など様々な面で活躍されてこられた寺本さんですが、そんな寺本さんが残された自筆原稿や作品、講演会資料などの一つひとつには部落解放運動や文化・芸術活動はもちろん、差別に対する怒りや人間の生き方に対する思いが様々な形で表されており、また、そこから寺本さんの魅力でもある人間に対する“やさしさ”や“あたたかさ”といったものが見えてくると思います。

ここでは、寺本さんが目指してきた部落解放運動や文化・芸術活動、そして生き方の原点でもある“思想”の部分について、作品や資料をとおして触れていきたいと思います。



自分の力で耕作しないものを 収穫とは言えない



“耕作”と“収穫”、一見、農作業を連想させるような言葉ですが、どちらも他の様々なものに置き換えることができます。

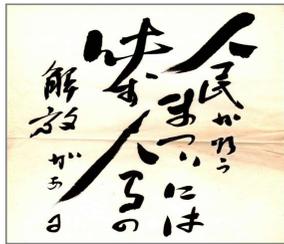
この書は「自分達の手で、自分達の手で勝ち取ってこそ、真の部落解放である」と言っているように感じられます。この短い言葉の中には、寺本さんが目指してきた部落解放運動に対する思いが込められているのかもしれない。

にんげんはすばらしい

にんげんは
うつくしいことに感動する
その感動は
ときには
美の創造となり
真の創造となり
その存在は
永遠である
時間をえて
文化となる
文化は
はたしき術は
大地から創る
大地から盛り上がる
にんげんは
すばらしい
労働の歌聲
生活の哀歌から
うつくしく
文化を
文化を
文化とは
人間の解放である



人民が行うまつりには 先ず人間の解放がある



寺本さんの作品には、自らの思いを大胆で力強く現わしたのから、とてもユニークな形で表したもので幅広く存在しています。それらについても一部紹介したいと思います。

一言で“まつり”といっても感謝祭や文化祭、それから慰霊祭まで、まつりは世界中でおこなわれており、その方法・目的も様々です。しかし、言われてみれば、この書のように、“まつり”とは“何らかの形で人間の心を解放する”という意味で、すべて共通していると思います。短い言葉ではありますが、寺本さんの人間解放への思いが伝わってきます。

たわむれの石でも

「私になか 悪いことをしましたか！」
と悲痛な叫びをのこして一人の娘は
自らの命を絶った
差別は恐ろしい
凶器をもちいずに
人を殺す
子供が たわむれに
石を投げて
たわむれの石も
致命傷
差別の石も 人を殺す
くすぶる
差別が
火を吹けば
戦争となる
差別の思想は 戦争につながる



元来
にんげんは すばらしいもの
母の泪に光る愛
平和をいだく やさしい胸
血まみれの手で
つかもうとする
自由と 平等
にんげん
の偉大なもの
横れんだりしてはならぬ
人間を冒瀆してはならぬ
人間は尊い

寺本さんの原点 西光万吉さんと水平社宣言①

寺本さんの思想について語る上で欠かすことができない人がいます。それは日本で最初の人権宣言とも言われている水平社宣言の起草者である西光万吉さんです。

水平社宣言や西光万吉さんについて、生前、寺本さんは様々な場で語っており、自筆原稿の中にもたびたび登場しています。



西光万吉さん(1895年～1970年)

ぼくの人間思想

ぼくの部落解放運動というのは人間解放運動なんだよね。自然からあたえられた、いわゆる、天賦人権運動ですわ。

自然生態系は、一見、弱肉強食に見えるけど、ライオンばかりの国にもなっていないよ。弱いものは、助けあうようになって共生しながら繁栄している。(中略)

だから、自然があたえた生命体としての人間には、性、人種、言語、宗教などいかなる違いによっても、差別できない自然権が備わっているんです。そやから、歴史がどうのこうなのも、無意味とは言わないが、ぼく流に翻訳すると、自然権、天賦人権とは、神からいただいた生命そのものや。だから、おたがいの自由、平等でなきゃいけんのですわ。

そういう本来の人間観が、水平社宣言の短い文章の中に入ってるんやね。

「寺本知のとずがた」にんげんはすばらしいよ

寺本さんの原点 西光万吉さんと水平社宣言②

この宣言はなんと誰んでも感動します。私は人間の尊厳をこれほどたからかに歌いあげた文章は、他に見たことはありませんが、これはもう単なる文章ではなく、人間であることの熱い想いとやさしい心、人間の血が脈々と流れている詩（ポエム）であります。

原稿「名もなく 貴く 美しく —水平社時代の思い出—より



水平社宣言全文

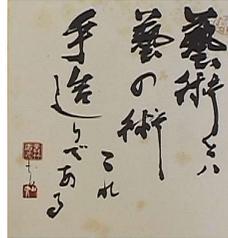
この人を皆んなが西光さんと呼ぶ。この偉大な哲学者、人間解放運動の大先達には、それとを越える大志くあつたかい。やさしい心があつた。だから誰もが尊敬しながらも西光先生と書わなくて、いつも親しげに西光さんと呼ぶのである。

原稿「やさしさに敬した人の顔とところ」より

ここで紹介している原稿「やさしさに敬した人の顔とところ」と「名もなく貴く美しく」では、寺本さんの水平社宣言や西光万吉さんに対する思いがとてよく表れていると思います。

やはり、水平社宣言の精神や西光万吉さんの生き方は、寺本さんの魅力であるやさしさやあたたかさの原点になっていると言えるのではないのでしょうか。

藝術とは芸の術 これ手造りである



この書は寺本さんの詩「にんげん、ばんざい！」の一節でもあります。この書には続きがあり、「手づくりとは あたたくい心である 真の芸術にはかならず にんげんの解放がある にんげんばんざいと書かれています」

寺本さんは生前「芸術は人間の本命であり、生きがいであり、人間を解放するものである」とよく発言していましたが、この書にもそんな寺本さんの芸術と人間解放に対する思いが込められているのではないのでしょうか。

商業人としての寺本知さん

寺本さんは、商業においても才能を発揮していました。本好きが高じて、1937年(昭12)に岡上の町で開いた古本屋が最初の商売でした。岡町商店街では、お菓子屋、古本屋、喫茶店をやってきました。

喫茶店「ドラ」の運営には市議会議員活動などで忙しかつたこともあり、直接的にはタッチしていませんでしたが、きちんとした経営方針は持っていたようです。

また、岡町商店街の会長や商工会議所の商業部会の責任者を長年務めました。

寺本さんの一歩先を見る経営センスや店舗センスは、最初はなかなか理解されなかった様ですが、現実の社会が追いついてきて、後でみなさんが納得することが多かつたようです。

解放運動においても、大阪府同和金融公社理事長や大阪府同和産業振興会監事などについており、部落の産業の振興に取り組んでいました。



古本屋を開く/青年と夜学会

寺本知さんは、古本屋を開く。そのときに、いろいろなことをよく勉強したと述べています。

店に来る浪速高等学校(現大阪大学)の学生の勉強する姿に感心するとともに、彼らが求める思想的書物、西田幾太郎の「善の研究」、出陣の「哲学以前」、倉田百三の「出家とその弟子」、唯門の『数算珍』などを寺本さんも彼らと対話するために読み、目覚めたと言います。



岡上の町に開いた古本屋で(1937年)

学生は将来に向かって、ちゃんと目標があって、いろんな本を読んでも勉強している。村の青年は、その目標まで、それも、わずかな金が入ると遊ぶ、これではあかん寺本さんは青年達と夜学会を始ます。夜学会には20人程度が集まり、哲学、歴史、理科など様々な勉強をしました。

店に来ていて感心になった教師が、夜学会を指導してくれました。『古事記』やファールルの『昆虫記』を使って教えてくれました。昆虫記は科学的な見方を教えてくれたと寺本さんは述べています。しかし、戦争の拡大で、青年たちが入隊や、徴用で夜学会は続けることが出来なくなりました。

魂の糧を売る店を開く



文苑堂前で

1945年(昭20)11月に大阪府書記になり、地方改善事業(その当時の同和事業)に務わっていました。しかし、1948年(昭23)3月、部落解放大阪青年同盟を組織した中心人物とすることで、依頼退職の形で大阪府の職員を辞めさせられています。その後、岡町商店街の中に土地を借り、1947年(昭22)ごろからお菓子屋「みつる屋」をやっていたのですが、経済中であったので、閉めることになりました。

その場所に古書籍店「魂の糧を売る店 文苑堂」を開きます。店の名前から対する寺本さんの妻がわかります。

本の買い付けや種貸付けは、寺本さんの仕事でしたが、解放運動で忙しいときもあり、店番は、妻の英美子さんがすることが多かつたそうです。

文苑堂の日々の売り上げは数々たつたものですが、定期的に催される阪急百貨店の即売会での売り上げは大きく、その準備に何日も前から取りかかるなど、夫婦そろって一生懸命働きました。

店に本を売りに来るのはお金を必要とする人たちがばかりで、本の持ち込みはお正月前など、お金が必要になる季節に急に増えたそうです。古本はそれほど高値で買われる商品でないで、仕入れが狭くと本だけが店の中にあふれ、資金が苦しくなることもありました。英美子さんが仕入れを抑えようと、本を売りに来た人に「預かっておきますから」とつけた晩、寺本さんは「相手も困ってはるから本を売りにきはる。ちょっと損をしても買ってあげな」と注意したというエピソードがあります。



改装されている文苑堂

岡町商店街と 豊中の発展のために



初代のアーケード

寺本さんは、1958年(昭33)6月から岡町商店街会長及び岡町商店街振興組理事長を1991年(平3)まで務めています。アーケードの改築(現在のアーケード)には大きな力を発揮しました。おた、商店街のあり方や顧客に対する対応、サービスなど商店街の健全への研修にも力を注ぎました。そして、寺本さんは、豊中商工会議所の常議員(1960年(昭35)～1994年(平6))及び商業連合会会長(1964年(昭39)～1992年(平4))を長きにわたり務め、豊中全体の商業の発展にも尽力しました。

他にも豊中商工会議所が中心となつて、豊中市と協力しながら開催していた大門公園での豊中まつりでは、責任者を務めたり、大店舗の進出に対して、小売業者の味方として活動し、ダイエーの千里中央出店の際も反対協にた一人寄り添い、最後にはダイエーとの仲介役として和解の調印にこぎ着けたというエピソードがあります。



豊中まつりのパレード

もちろん、寺本さんのご家族は、寺本さんの「意外な側面」をもっとたくさん知っていて、こんな風に語ってくださいています。

「家庭では、どてらなんか着て、のそのそ動いて鈍重な感じですよ。家庭で生活人としての親父と政治活動の現場でそういうのを指揮している親父というのは、印象がものすごく違うんです。」

「仕事のことって本当に家には何も言いませんでしたね。」

「冬でしたら丹前とか、寒がりですから暖かい格好をしておこたに足入れて長くなってテレビ見ていましたね。」

*寺本知さん生誕100年記念ビデオのためのご家族へのインタビューから。

詳しくは、10月6日に公開されるビデオをお楽しみに。

フットワークの軽そうな運動家である寺本知さんからは想像できないような「どてら／丹前」を着て、のそのそとした姿。

ところで、この「どてら／丹前」は、寺本さんと母を結ぶキーアイテムなのです。

衣類の中では丹前がいちばん好きだ。軽くてあたかたく、そのくせ通気がよくて着ると落ちて着けた。冬、ゆつたりと落ち着けた。私の来ている丹前がいくらか着れがしてくると母は「また良えのんつくんとあかんア……」と言う。「そやな、生地やていさいなんかどうでもええさかい、かなくて温いのんが良えねんけどア……」と私はそんざいに言うのだが母はまじめにうなずいていた

三月十七日の夜明け前、母は心不全で急逝した。あれから桜の花が咲き、その花も散ってしまった

丹前

心臓を病んでいた母は医師から安静を命ぜられていたが、みんなの留守をみはからっては何人にも生地を選び、仕立て屋に注文をまわして、その死期を予感していたのか母は母までの数ヶ月の間に執念の厚く入った私への丹前を二枚もつくってあった

母、丹前を肩にかけて庭に立つと黄色い花がうらみの中、ゆがみ、キラとひろがり、渦を巻きはじめる

*寺本知「焦心疾走」(豊中文学、1981年) 66-67頁

母に贈る詩

桜の花が散ってまた
春は来
襟元がしんしんと寒く
ふと めがさめた
すくと
そくそくと林にさかしのうら
じーんと ころの奥に
深く暗い穴を開けた

母が死んで
三十五日

桜の花が散ってしまった
夜明け
襟元がしんしんと寒く
ふと めがさめた
すくと
そくそくと淋しさがしのびこんで
じーんと、ころの奥に
深く暗い穴を開けた

(未完表)

家族への想い

「よく気がきますし、本当に優しい人でしたね。もうちょっとあんなに背負ってやさしいというたら、本当に主人ですよ。」

*寺本知さん生誕100年記念ビデオのためのご家族へのインタビューから。

あの日
あなたは二十一歳
はじめて、手を握ってみたら
「痛ッ！」とあなたは
あなたに恋をしたあなたの手は
おどろいて離したあなたの手は
赤く腫れあがっていた
結婚して
翌年
爆弾のどどなかで
女の子ができた
それから！
女の子ができて
また
女の子ができた
上の娘は
もう十八になった
男の子たちも大きくなった

手

もうすぐ
正月がやってくる
今夜もあなたは
就寝(やすむ)まえに
手のヒビわれに
クリームをすりこむ
カサカサ カサカサ
静かな
夜だ！
(一九六三年師走の夜)

*寺本知「焦心疾走」(豊中文学、1981年)、68-70頁。

父について

寺本さんは、詩のなかで、父についてあまり多くを語っていません。しかし、自筆のノートに「心のつづやき」をみることができました。



*自筆ノート『1978年ごろ』より

私たちは1944. 4. 11に結婚した。それはまた、私の父の葬儀の日でもあった。

父の葬儀の日、息子の結婚式をあげるなどとは、前代未聞のことはあるが、未だ若かった私は、父の突然の死でうろたえ、ただげぜんと上司先輩たちのいうままになってやっただけである。

生前の父が私の結婚をとても喜んでくれたように、その父の意向をくんで、とにかく、告別式までに、三々九度の盡だけを受交そうという私の先輩であり、父の友人たちの提案で、この葬儀は行われた。親類はじめ、葬儀にかかわった隣近所の人々は驚いたことをまたない。……

父の死は、診断書には難か、ぜんそく性心臓麻痺だと記入されていた。父は心臓の弁膜に先天性の故障があった、ある種類の労働ができて、それ以外の労働はできなかったようである。

実に、温厚な人物で、めったなことでは他人と口喧嘩もしない人であった。私は母にはどなられたり、たたかれたことは、2、3度あったが、父には叩かれた記憶はない。

父は、小学校しかでていないが、部落の青年としては、よく読書した方で、村の青年をお寺に集め、夜学の指導者などもしていた。選考試験は、かんたんにパスしたようだが、町役場の吏員になるのは、やはり、選別のためにかんたんな抵抗があったらしく、採用まで2、3年かかった模様で、夕飯の時、母にぐちっていたことを思い出す。

父は、囲碁、将棋を好み、尺八を都都逸の中程くらいまでいった。絵もすきならしく、旅の絵師をとらうりゆうさせて描かせていたりしたこともあった。